

平成 27 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	神戸常盤大学 教育イノベーション機構 機構長・教授 柳 敏晴
研究テーマ	安全で安心できる社会創造のための「いのちの教育」の構築、普及・展開の基礎的研究

<助成研究の要旨>

現代社会に住む私達は、いつでも、どこでも、誰でも、災害に遭遇する可能性を持っています。本研究は、安全で安心できる社会創造のために、野外教育の方法を活用した防災・減災教育のモデル「いのちの教育」の構築を目的としました。

防災教育は、阪神淡路大震災以降積極的に進められ、助け合いや感謝の心、家族地域の重要性等「絆」の教育でした。東日本大震災以後防災・減災は、地域、文化に関係し、公教育で、地域に応じた防災教育が必要になりました。

私達日本人は東日本大震災で、日本の国土が先進国の中で最も自然災害が多い危険な地域であることを、改めて思い知らされました。自然災害の外力は、ヒト、モノ、組織崩壊、社会システム・活動に深刻な影響を与えます。私達は、大震災で「いのちを守る」難しさを痛感しました。防災教育とは、「いのちを守る」重さと難しさを人々の心の中に育むことです。研究助成を受け、安全で安心できる社会創造のための、「自分のいのちは自分で守る」「家族のいのちは家族で守る」「地域のいのちは地域が守る」、自助・共助・公助の社会構築を日指す「いのちの教育」の理論構築と普及・展開を目指しました。

神戸常盤大学は、阪神淡路大震災発生時長田区大火災発生時に緊急避難場所として、体育館を避難所として避難者 600 名を受け入れました。このような歴史を持つ本学は、災害支援、意識啓発を中心とする活動（東日本被災地への派遣等、復興の集いと「未来に向けての防災宣言」等）を継続実施しています。

研究方法は、国内外の野外教育、防災・減災教育の先行事例の収集と分析を行いました（6 月北米ウエルネス学会、8 月北米スプリングフィールド大学、3 月ニュージーランドウォークセーフティ NZ 他）。先行事例研究分析と、現状調査結果からの課題発掘から、防災・減災教育の理論構築を行いました。防災・減災教育に関する調査項目を精査し、調査を実施しました。調査結果の解析を進め、「いのちの教育」の理論構築を試み、モデルプログラムを作成しました。その上で、普及・啓蒙の展開方法を検討しています。

東日本大震災の被災地の一つ石巻の高校を訪ね、震災復興について講義を行い、その後修学旅行の際に 20 年前の阪神淡路大震災の被災地である、神戸市長田区の街歩きを行い、復興状況から今後の防災・減災教育についての学びを進めました。

神戸発「生きる力を育み未来へつなぐ」防災教育大会への協力を通し、防災教育の現状を把握し、今後の防災教育の展開を考えました。

防災・減災教育は、「いのちを守る」重さと難しさを人々の心の中に育む重要な教育であることが明らかになりました。命を守る三原則は、想定にとられるな！その状況において最善を尽くせ！率先避難者たれ！と片田（2012）が述べていることに尽きます。避難三原則は、津波や地震の知識の教育ではなく、自然に向き合うための『姿勢』を教える教育です。自然を愛し、自然に対する畏怖の念を持ちつつも、災害時に自分の命を自ら守り、自分ができる最善を尽くして生き延びる、この様な『姿勢』を育むことが、防災教育の最も重要な要素です。

また、防災・減災教育を通した「いのちの教育」は、人々や組織が互いに学び合う相互的プロセスでもあります。範囲は、小中高校や大学での学校教育よりも広く、自然災害から身を守るための伝統的な知恵や地域固有の知識を知り、活用することも含まれます。しかし、実際的な問題なので、単独で小中高校や大学の課程教育として存在できません。防災・減災教育を通した「いのちの教育」は、正課教育、課外活動、学校内活動、学校外活動のそれぞれのバランスを保つ必要があります。防災教育は、学校、家庭、地域社会を繋ぐもので、地域防災活動関係者と共に、地域に「いのちの教育」を中心とした災害文化を定着させる社会システムの構築が必要と考えられます。